

2012

水原紫苑『びあんか』を読む

わたしたちの短歌は、大ていは、わたしたちの日常生活の中から生まれていきます。だから、生活臭といましようか、毎日の生活のなにかを引きずっています。また、わざと生活臭を濃くにおわせるような作り方をすることもあります。しかし、今までわたしが、いい歌だと思つて来たものの中には、生活の匂いをきっぱりと絶つて作られたものもあります。

美しき脚折るときに哲学は流れいでたり 劫初馬より

水原紫苑『びあんか』

一九八九年、今から四半世紀近く前に出た歌集の中の歌です。「劫初」は「この世の初め」ですが、世界のはじまるときに、と考えておきます。そうした大昔に、美しい一頭の馬が、美しい脚を折り曲げて地上に座ろうとした。「哲学」というものは、その瞬間にこの世に流れ出たのであると言っています。たとえば、古代ギリシヤのプラトンやアリストテレスの説いたような見事な人生智であり人間理解である「哲学」。ああいったものは、どんな機会に、生まれ出たものだろうか、と考えてみます。それは、たとえていえば、

一頭の美しい馬が脚を折りたたんで地上に座るときのような、それもこの世界の一番初めの時に起きたような馬のイメージから流れ出たのだ、というのです。

こういう歌は、人間がものを考える存在であり、その考えは、さまざまなイメージによっていろどられており、その空想や思考そのものもなお一首の歌となりうることを示しています。

かといって思念であり空想ならなんでも歌になるというわけではありません。その思念が、この水原紫苑しおんの一首のように、短歌の調べとしても美しくなければなりません。たとえばこの歌の第四句「流れいでたり」といつておいて、どこから流れ出たのかを読者に想像させておいて、さて、結句でまず「劫初」と時を指定します。そののち「馬より」と、流れの源を明らかにするのです。読者には、イメージ（意味内容）が、定型のことばのリズムに沿って提示されます。しかも、その内容に意外性があつて読者におどろきを与えます。読者はそこから詩的な空想へとさそわれます。

もう一首『びあんか』から挙げてみます。



光線をおんがくのごと聴き分くるけものか良夜眼とぢゐる

水原紫苑

さきほどの歌でも「劫初」という漢語が出て来ました。わたしは勝手にそれを「世界の初まり」とうけとりましたが「劫」はサンスクリットのカルパで「きわめて長い時間の単位」のことですから劫初には大昔という意味と共に、古いインド的な世界観がからみついているようです。つまり読者によってどのようにも解釈されうるということです。その点、この歌でも「光線」という漢語からはじまります。光線は、この歌では、あとの方で「良夜」(月の明るい夜。特に中秋明月の夜)が出て来ますから、月の光であります。それなら「月光を」「つきかけを」「月のひかりを」などといってもよいわけですが、作者は「光線」という、ごく一般的な、光ならなんにでも通ずることばを使っています。作者はまず、広く、その点あいまいな概念を出しておいて次へ進みます。

そのあと「おんがく」という、平仮名が出て来ます。これも「音楽」でもいいのですが作者は「おんがく」つまり「お」「ん」「が」「く」と読者には読ませています。

歌の内容も、意外で、元来、視覚的な存在といえる「光線」を、まるで音楽をきくみたいに耳で「聴き分」けながら「けもの」が、月光をくまなく受けて「眼とぢゐる」というのであります。

作者ははじめに「光線」といって、なんの光線かを指定しませんでした。「けもの」といって、なんの動物かもきめていません。まあ、わたしたちの感じで、犬か猫かの小動物で、飼育動物だろうという見当はつきませんが、明記はされていません。そういうところ

に、この作者の歌のおもしろさもあるようです。意味内容のあいまいさが、かえって、読者にいろいろと想像をさせるおもしろさでもあります。

炎天に白薔薇断つちふかきしづけさありて刃傷めり

水原紫苑

断崖たなざし対たいへる牛をおもふなり夜半よなかぎりなくおほきく白し

同

この『びあんか(白の女)』という歌集は、(白)という色で通底されている歌集であります。白の出てくる歌は秀歌が多いのです。右に白バラと白い牛の歌を挙げてみました。

炎天下で白いバラの花を切りとって活け花にしようとしたのでしょうか。しかし、歌はそんな後のことは問題にしません。「断つ」と「のち」のあいだに一拍置いた歌い方で、断ち切ったあと、「ふかきしづけさ」が、この世におとずれたことが大切です。そして鉄の刃は、たったそれだけのことで「傷」んだのです。白バラの力が思い知られます。

もう一首は、夜中に、きり立った崖に対している巨きな白い牛であります。こういうイメージは、当然、人生の断崖を目の前にして、それに対決しようとしている人間(作者)を思わせるのです。この歌はそんなことは言っていない。ただ、夜中に断崖に対して立つ「かぎりなく」大きく白い牛を頭に浮かべているだけで、倫理的というより、純粹に美学的なイメージの選択かと思われます。またそれ故にこれらの歌の(白)の力が、読者を打つのだと思われます。